

第二邪宗門

北原白秋

青空文庫

円燈

飢渴

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

わが熱き炎の都、

都なる煉瓦の沙漠、

沙漠なる硫黄の海の広小路、そのただなかに、
饑^うゑにたるトリイトン神の立^{たちすがた}像、

水涸れ果てし噴^{ふきあげ}水の大水盤の繞^{めぐり}には、
はくはうらう^{きだ}白珣瑯の石の級ただ照り渴^{しび}き痺れたる。

そのかげに、紅^{あか}き襯衣^{しやつ}ぬぎ

悲しめる道化芝居の触木^{ふれぎ}うち、

やけ^{ひき}自棄に弾くギタルラ弾者と、癩^{しやくもち}持と、

たはれ^{めくるめき}淫の舞の眩暈、

さては火^{ブランデー}酒かぶりつつ強ひて転^{ころ}がる酔^{ゑひどれ}漢と、

笑ひひしめく盲^{めくら}らは西瓜をぞ切る。

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

既に見よ、瞬間たまゆらのさき、

ほのうれひあや仄かなる愁の文にしみじみと

竜馬りうめの羽うらにほひ透き、揺れて縛もつれし

水盤の水ひとたまり。

あるはまた、螺を吹く神の息づかひ

焰しづに頻吹きひえびえと沁みにし歌も

今ははや空からびぬ、聴くは饑うゑ疲れ

鉛になやむ地の管くだの苦しき叫喚さけび。

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

虚空には銅色あかねいろの日の髑髏どくろまろ転びかがやき、

雲はまた血のごと沈黙しじもに鎔けとろゆき影だに留めず。

ただ病める東南風シロツコのみぞ重たげに、また、たゆたげに、

腐れたる翼つばさの毒を羽ばたたく。

七月末の長なが旱ひでり、今しも真昼、

煉獄の苦熱の呵責かしゃくそのままに

火輪車くわりんしゃ駛り、石油泣き、瓦斯かわめの香喊かめき、

真黒げに煙突震ふ狂ほしき、その騒かしき。

誰たれぞ、また、けたたましくも、

朱^{あけ}の息引き切るるごと、
 狂気なす自動車駆るは。

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

狂気^{きちがひ}者よ、人轢^ひき殺せ。

癩^{しやくもち}持よ、血を吐き尽せ。

搔^いき鳴らせ、絃^{いと}切るるまで。

打ち鳴らせ、木の折るるまで。

飛びめぐれ、息の根絶えよ。

酔へよ、また娑婆^{しゃば}にな覚めそ。

めしひ
盲らよ、その赤き腸はらわたを吸へ。

あはれ、あはれ、

この早ひでりつづかむかぎり、

汝なが飢渴きかつ癒えむすべなし。

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

わかき喇叭

苦しげに喇叭らっぱ吹く息いき、

苦しげに喇叭らっぱ吹く息いき、

汝はゆきていづくにかへる。

心臓のあかきくるめき

そを洩れて吹きいづるなる。

なやましき靈たまのひとすぢ

いと冷ひやき水の音色ねいろに。

毒どくふかき邪欲じやくの谷に

淫いん樂らくの蝮くちばみまとふ、

はたや身は痺しびれとろけて

断たちがたきほだしに悩なやむ。

狂^{きやう}念^{ねん}のめくらむ野^の辺^べゆ

挑^{いど}み搏^うつ硫^い黄^{わう}の炎^{ほむら}、

また苦^{にが}き檻^{をり}のおびえに

くれなるの破^は滅^{めつ}をさそふ。

さまだるる恋^{れん}慕^ぼのあへぎ

蒸しよどみ、かくてなやめど

われは吹く、息もほつほつ

うらわかき靈^{たま}の喇^ら叭^{っぱ}を。

かげ暗^{くら}き恐怖^{おそれ}の垂^{たり}葉

そのなかに赤き実熟るる。

わが夢^{ゆめ}はあなその空に

濡^ぬれつつも燃^もゆる悲^{かな}愁^{しみ}。

濡^ぬれつつも燃^もゆるかなしみ

そが犠^{にえ}牲に吹きいつるなる。

かぎりなき生^{いのち}命の苦^く痛^{つう}

かぎりある胸^{むね}の力^{ちから}に。

あはれ、なほ、喇叭^{らっぱ}吹^いく息^{いき}、

あはれ、なほ、喇叭吹く息、
汝はゆきていづくにかへる。

青き葉の銀杏のはやし

青き葉の銀杏の林、
細らなる若樹の林。

はた、青き白日の日かげに、
葉も顫ふ銀杏の林。

そのもとを北へかすめる、
ひややけき路みちのひとすぢ、

かすかにも胡弓こきゆうまさぐり、
ゆめのごと、われはたどりぬ。

青き葉の銀杏いてふの林
行き行けど路みちは尽きなく。

細ほそらなる若樹わかきのはやし、
頬ほほ白しろの鳴なく音ねもきかず。

すすりなく愁うれひの胡弓こきゆう、
葉ふるの顫ふるひ、青き日かげ。

さはひとり、われとさすらひ、
われと弾ひき、聴ききもほれつつ、

日もすがら涙さしぐむ、

青き葉のかげをゆく身は。

それとなきもののかぜにも、

弱^{よわ}ごころ耳しかたむけ。

たちとまり、ながめ、みかへり、
あはれさの絃^{いと}をちからに。

ひそやかに、また、しづやかに、
にほやかに尋^とめもなやめば。

薄^{うす}らなる青の絹衣^{すずし}も、

いつしかに露にしなえぬ。

さあれ、なほ弾ひきゆく胡こ弓きゆう、
はてもなき路みちのゆく手に。

いつまでかかくて泣きつつ、
いつまでかかくもあるべき。

あはれ、あはれ、銀杏いてふの林、
青き青き若樹わかきの林。

森の奥

森の奥ほのかにくらし。

夏のすゑ、長月はじめ、

あはれ、日も薄らうすらに、

薄黄^{うすぎ}なる歎^{なげき}沁みゆく

浮羅^{はうのき}爛^{のき}勤の広葉の青み、

あるはまた大木^{おほき}の胡桃^{くるみ}、

憂^{わづらひ}愁のかげのふかみに、

燃え^ものこる熱き日ざしは

黄に透かし暮れて薫れる。

そのなかに妙^{たへ}にしづかに
物おもふ白馬^{はくば}のあかり。

それやはた、夏の日の神
夕ぐれに騎^のりやわすれし。

紅^{くれなる}の手綱の色も、

白がねの鎧も、鞍も、

いとほのに夢の照^{てる}妙^{たへ}
ただ白し、ほのかに白し。

そをめぐり秋の笙^{しやう}の音^ね
蕭^{しめ}やかにひそかに愁ふ。

響かふは角^{つぬ}の音色^{ねいろ}か、

病める果^みか、饅^すえゆく歌か。

かくてまた暗き葉越に

鳩の笛沁みはわたれど。

薄^{うすぎ}黄なる光の透かし、

ひとすぢの昨^{きそ}のほめきに、

ほの白う暮れてたたずむ

物おもふ色のしづけさ。

森はいまほのかにくらし。

円燈

くれがた 薄暮の谿間たにまの恐怖おそれ。
 こよひ 今宵またかなたに点ともる
 くれなゐまろともしび 紅の円き燈。

そを知るや、知らずや、なほも
 なやましきにほひの奥おくに
 うづくまり黙つぐむひとむれ。

ましろ 真白なるゆめの水牛すゐぎう、
 しかはあれど、なべて盲めしひし

けもの おも おきふし
獣らの重き起伏。

めし
盲ひしは瞳のみかは、

ものにぶく、闇^{やみ}にくぐもる
もろもろのこころごころも。

かくてあな幾夜^{いくよ}か経^へにし。

もの
言いはず、かうべもあげず、

さあれども物^{もの}待つごとし。

ふか
深みゆく恐怖^{おそれ}の沈黙^{しじま}。

そのなかにこよひ今宵も消きゆる
くれなゐまろともしび
紅の円まき燈。

尋とめゆくあゆみ

いと高いと深しづいと静しめにいと蕭しめやげる
よ夜の森のかげ、暗くらひやゝく冷つらねなる列ねのものを、
われはあゆむ。

いと高いと暗みづいと密みづにいとほのかなる

四十一年六月

細^{ほそ}らなる赤楊^{はんのき}の列^{つらね}、そのもとの底の底を

われはあゆむ。

いと高くいと深く沈みたる憂愁^{うれひ}のもとを、
真素肌^{ますはだ}のましろなる、衣^{きぬ}つけぬ常若^{とこわか}の矜^{ほこり}もて

われはあゆむ。

赤楊^{はんのき}のとある梢ありとしも見へぬ空のけはひ、
あはれその枝に色紅き小鳥^{こどり}の如も星の見ゆる。

あはれひとつ

いと高いと深くいと静しずにいと蕭しめやげる
 夜よの森のかけ、暗ひやく冷やなる列つらねのもとを、

われはあゆむ。

さあれ今もの言いはぬ獸けもの忍しのびやかに蹠つきぞ来きぬる。
 昨きのふ日ふより去こ年ぞより生あれしより、否あらず、前さきの世よより

蹠つきか来きぬる。

かかる夜よのとある梢あは哀はれその空に星の見えつ。

紅き星紅き星ほのかにもわれは知れり、

かかるゆめも。

いと高くいと深くいと冷ひやにいと蕭しめやげる
夜の森よのかげ、ふとし、あな、路みちは落つる。

あらぬ谷間。

哀あはれ哀あはれあらぬ谷にいと暗くらく霊たまや落つる。
真素肌ますはだの悲哀かなしみよ血かの香かする荊棘いばらのなかを

いかにわけむ。

足音あのとのす、言ものいはぬ獸忍けものびかにひき歸かへすらし。
哀あはれまたひとつ星、見もあへぬ闇のかなたに

はたや消ゆる。

忽^{たちまち}にものの呻^{うめき}吟、やはらなる足に触^ふれつつ
そここの血の荊棘^{いばら}あなやその暗^{くら}き底より

赤子啼きいづ。

我子の声

われはきく、生^{うま}れざる、はかりしれざる
子^この声^{こゑ}を、泣^なき訴^{うた}ふ赤^{あか}きさけびを。

四十一年六月

いづこにかわれはきく、見えわかぬかかる恐怖おそれに。

かの野辺のべよ、信号柱シグナルは断頭くびきりの台だいとかがやき、

わか葉洩ばもる入日いりひを浴あびてあかあかと遙はるに笑わらひき。

汽車きしやにしてきてはきく、轆しかれゆく子らの啼声なきごゑ。

はた旅たびの夕まぐれ、栄えはのこる雲くもの湿しめりに、

前さき世のよの亡なき妻つまが墓はかの辺べの赤あかはに埴はにおもひ、

かくてまた我われはきく追懷おもひでの色いろとにほひに、

埋うもれたる、はかりしれざる子この夢ゆめを、胎たいの叫さけびを。

歸^{かへ}りきてわれはきく、ひたぶるに君抱くとき、
 手^{たち}力のほこりも尽^つきて弱^{よわ}心^{こころ}なやむひととき、
 たちまちに心^{こころ}つらぬく
 赤き子の高き叫^{たかさけび}を。

声なき国

声^{こゑ}もなき薄^{くれ}暮^{がた}の国、
 追憶^{おもひで}のこなたなるほの暗^{くら}き闇^{やみ}、
 哀^{あは}れ、さは冷^{ひや}けき世^よの沈^{しじま}黙^{もく}、恐^{おそ}怖^{それ}の木^こかげ、

四十一年六月

何処いづこより見ゆるともなく出いでて来し思おもの女をみな
 清きよらなる真素肌ますはだの身みの独ひとりほのかに暮くる。

声こゑもなき国の白楊はくやう、
 つながもろがはふる
 列長つなながう両側もろがはに顫ふるへわななき、

色いろ青あをき蠟ろうふの火ひのほの暗くらみおびゆるごとく、
 ひろ
 広ひろきより狭せばみ暮れゆく其その果はての遠とほき切目きれめに、
 ほの
 灰ほのかなる噴ふきあげ水みづの香かぞひとり密ひそかに泣なける。

声こゑもなき国のさかひに

すすり泣くそのゆめよ、水のひとすぢ

かすかにも色映り消えも入る吐息する時、
 哀れ、さは光匂はぬ色もなく声もなき野に、
 ただ寒う涙垂れ熟視めぬる女の思。

声もなき国のかなたは

あかあかと色わかき追憶の空。

歡樂の樂の音よ、悩み添ふ甘き悲哀よ、

猛り狂ふ恋慕の夢の此方には聞えこそ来ね、

雲はただ昨のごと紅の色にただるる。

声もなき女の思、

熟視めつつ、ややにまた暮れもいためど、
 ただ密に頼みてし噴水のほひとだえて、
 存命し悩の夢の曲節も見るによしなみ、
 真素肌の身は悲し冷けき石になりゆく。

声もなき薄暮の国。

かくていま、追憶の空はあかあか、
 血のごとも雲は顫へ楽の音の慄くなかに、
 閃めくは聖体盒の香の曇、骨も斑らに
 白白と浮びちり、あはれ早や沈み暈めく。

幽潭

あはれ、こはもの静かなる幽潭の
深みの心——おもむろに澀みて濁る
波もなき胎のにほひの水の面。
をりをり鈍き蛇のむれ首もたぐれど
いささかの音だに立てず、なべてみな
重たき脳の、幽鬱の色して曇る。

さるほどに日も暮がたとなりぬれば、
あたりの樟の薄ら闇しのびにつる

灰色の妖女えうぢよの冷やきうすわらひ。

さあれど、ゆるにしづしづと髪曳きうかぶ
底そこの主面ぬおもてはかたく縛しばられて、

ただほの白しろき身をなかば、水よりいづる。

ややありて、息吹いぶきのゆめもやはらかに、

盲めしひし空をうちあふぎ、管くだかたぶけて

吹きいづる石しやぼん 齧たまの玉あわの泡のいろ

ひとつびとつに円まろらかに紅あかみてのぼる、

これやかわかの若わかくいみじき血のにほひ。

かくしてももの静しづやかにひとときあまり。

ふと、ひらく汀の瞳くろぐろと、

冷やにならびうかがへる妖女のつらね

ろつこつ 肋骨の相摩るごとき笑して

はひいろ 灰色の髪音もなくさばくと見れば、

そこここに首もたげゆく蛇のむれ、

ああまたもとの幽鬱に主消えしづむ。

かくてまた、鈍く曇れる水の面、

濁れる胎のもの孕む音ともなしに、

静寂の深みに呻く夜の色。

ほど経^へて声も消えゆけば、ああ見よ、いまし

幽^{いうたん}潭^{にぶ}の鈍^{にぶ}める空にあかあかと

のぼれる玉か、数しれぬ幾^{いくせんまん}千万の新^{にひほし}星^{ほし}の華^{はな}。

四十一年六月

急瀬

『暗い。』『暗い。』

聴^きけ、夜に叫^さぶ髑^{しかうべ}髒^{はやせ}、急瀬^{いそ}の小石、

熟^み視^つむるは死よりも暗^{ちん}き鳩^{どく}毒^{どく}の

発^ほ作^{つさ}に頻^し吹^ぶく水^{おも}の面、

聴け、わなわなとかたかたと千万ちよろづ歎く。

時は冬、熊野の川の川上の如法の真闇、
峽かひの底。

『暗い。』『暗い。』

聴け、はや叫ぶ髑髏されかうべ、急瀬はやせの小石。

さてはまた、聴け、齒を洗ふ血の流

真黒まくろに滴したる音ささと

はた、きしきしと泡たぎち噎むせびぬ、まさに

丑満くろがねぐもの黒金雲たれぎぬの棺衣ななたけは七岳めぐり、

風顫ふ。

『暗い。』『暗い。』

聴け、また叫ぶ髑髏されかうべ、急瀬はやせの小石、

熟視みつむれど喚わめけど、水くちばみは蜷なみの

腹なし、縞もひた黒に

磨りては走る夜よの恐怖おそれ、この夜よもさらに

琅玕らうかんの断崖きりぎしづたひ投網とあみうつ漁いさりの翁おぢの

火も見えず。

『暗い。』『暗い。』

聴け、ひた叫ぶ髑髏されかうべ、急瀬はやせの小石、

今はかの末期まつごの苦患くげんひたひたと

わななきほそる一刹那、

鯨しやちより疾はやく、棹あげて闇より闇へ、

火もつけず、声せず、一人丈ひとりたけなが長の髪吹き乱し
舟ふねきたる。

『暗い。』『暗い。』

聴きけ、今叫さぶ髑髏かうべ、急瀬はやせの小石、
一齊ひとときに驚破すはと慄くひたおもて

かそこそ噛めば竜骨は

血の香か滴る鋸やすりを鑢はの刃もて

磨る如く、白齒をきしと一文字に、傷きながら
逃れさる。

『暗い。』『暗い。』

聴け、なほ叫ぶ^{されかうべ}髑髏、急瀬^{はやせ}の小石、

瞬間^{たまゆら}の膏油と熱き肉^{しし}の香^かに

狂へる慾は護謨の火の

断^{ちぎ}るるがごとひたわめく、呪詛^{のろひ}と飢^{うゑ}と

悔^{くい}と死と真黒に噎^{むせ}ぶ血の底に齒を噛みながら

熟^み視^つめたる。

『暗い。』『暗い。』

聴け、なほ叫ぶ髑髏されかうべ、急瀬はやせの小石、

熟視みつむれど天てん蝎宮かつの光だに

影せぬ冥府みやうふ、わなわなと

喚わめけどさらに蝮くちばみは腹磨り奔り、

絶えずまた泡だち落つる血はささとその戦慄わななきに

噎むせぶのみ。

『暗い。』『暗い。』

聴け、夜に叫ぶ髑髏されかうべ、急瀬はやせの小石、

熟視みつむるは死よりも暗き鳩毒の

発作ほつきに頻吹しぶく水の面おも、

なほ、きしきしとかたかたと嘆けど、哀あはれ、

億劫おくこふの窮きはまりあらぬ闇に堕ち闇に饑ゑゆく

人の群。

二つの世界

色あかき世界のなかに

うららにも小鳥さへづり、

色白き世界のなかに

ものにぶき駱駝らくだは坐すはる。

ものにぶき駱駝らくだの見るは

白き砂、白き思の星、

えもわかぬ髑髏どくろのなげき、

ピラミドのたそがれの色

うらなる小鳥のうたは

また遠く、ひと世よへだてて

脳なうの内、もだえの熱ねつに、

諛言うはごとのかずかずうたふ。

かなたには隊商カラバンの鈴、

こなたにはあかきさへづり。

今日けふもまた境し立てる

スフィンクスひとりしづかに。

スフィンクス、恐怖おそれの沈黙しじま、

そが胸の象形文字しやうけいもじの

謎なぞも、あな、半なかしろく、

はた赤く、聴耳ききみみ澄すます。

あはれ、いま、白き世界の

ゆふまぐれ。しかはあれども
色あかき世界の真昼^{まひる}。

スフィックス、こころは惑^{まど}ふ。

暮れなやむ心のあそび

晩^{おそなつ}夏の暮れなやむ日のわがこころ
球^{びりああと}突をばもてあそぶ、脳のくもりに

うしろより煙草のくゆり病ましげに、
なにともわかぬ思きて覗^{のぞ}く心地す。

四十一年八月

玉ふたつわれの好める色したる、

また玉ふたつうち曇る白の円みす。

棒とりていづれか突かむ。うち見れば

萌黄の羅紗の台の面ほのに顫へる。

その嘆き、おぼろげながらわれぞ知る。

いつのゆふべとわかねども負傷ひし胸の

そのにほひ、棒とりながらわれぞ知る。

かくてもやまぬわがあそび、色入りまじる。

そを見つつ後^{うしろ}にけぶすかの思

なにしか笑^{わら}ふ。さあれども暮^くるところは

色あかき玉もてあそびうちなやむ。

重き煙草にまどはしく眩^{めくら}暈みながら。

いづこにかものなやましきはなしごゑ

あるはきこゑて、ものあかくあかる心地す。

わが脳のなかにか、室^{むろ}のうつつにか、

火^{とも}点るときそのけはひ、遊^{あそび}戯夜に入る。

四十一年八月

鑲工

静しづやかに泣きつつあれば、

わがこころ鑲もぎ工いくなしぬものとなく、――

正せい方形はうけいの鑲もぎ工いくのその壁かべをしも見まもれば

そはものにぶき顔おもの面、

面おものなかばを、やはらかき茎きのうねりや、

あかあかと蔽おほひ燃もゆめる罌けし粟しのゆめ

そのかげに、

そのかげに、

盲^{めし}ひたる白き眼ふたつ。

あはれその

白き眼ふたつ、

なにか見る、

夕^{ゆふ}ぐれのもののしじまに。

天幕の中

色にぶき毛織^{けおり}の天幕^{てんと}、

そがなかにわがおもひひとりしあなる、

あはれ、盲^しひたる白き目に花とりあてて、

そが紅^{あか}き色見むものと燥^{あせ}りつつ、さは燥^{あせ}りつつ、
色にぶき毛織^{けおり}の天幕^{てんと}
いつまでかわれの思^{おもひ}のひとりしあなる。

四十一年八月

髑髏^{みづ}は熟視^みむ

髑髏^{どくろ}は熟視^みむ、きゆらそおの血^{さか}の酒甕^{がめ}の間^{あひだ}より、
髑髏^{どくろ}は熟視^みむ、命^{いのち}なくただうち凹^{くぼ}む眼^{まなこ}して、
髑髏^{どくろ}は熟視^みむ、忘^{わす}れたる思^{おもひ}ひでんとするが如^{ごと}、
髑髏^{どくろ}は熟視^みむ、寝^ねそべりて石^{しや}鹼^{ぼん}玉^{だま}吹^めく女^めが面^{かほ}を。

四十一年六月

樟の合奏

樟の合奏

初夏しよかそらの空。

灰白くわいはくしよく色の雲のもと。

水沼みぬまのほとり。

ひと叢むらの樟くすのわか葉ばの黄金こがねいろ

梢^{こずえ}も高く、

濡^ぬれ濡^ぬる雨^う後の^ご夕^ゆの^ふひとあかり、

入^{いり}日^ひに燃えて

潤^{しめ}やかに、華^{はな}やかに、

調^{しら}べあはする

かなしみの、

よろこびの、

くるしみの

香^かも狂^{くる}ほしき生^{せい}の曲^{きよく}……夢^{ゆめ}の合^が奏^{っさう}……

そのかげに、

あか
赤き煉瓦の

へんあつじよこゝめし
変圧所、心盲ひし

かうあつ

でんき

わめきおと

高圧の電気の叫喚音もなく、

ななめはし

はりがね

斜に走る銅線の

かきむしりゆく火の苦惱。
なやみ

はたやオゾンの香のしめり、渦巻き縋れ、
うづまもつ

ひる

よ

昼も、夜も、

間なく、時なく、
まとき

ひたぶるに暈めき、醸す死の恐怖、
くろかもしおそれ

つら

はしら

列ね立てたる柱には、

『触るる者かく死すべし。』と
ふものし

髑髏^{どくろ}あり、ひたと黙^{つぐ}める。

また、見よ暗^{くら}くところと、

曇^{くも}り濁^{にご}れる鈍^{にび}色^{いろ}の水沼^{みぬま}の面^{おも}を。

病^やめる壁^{かべ}、

樟^{くす}の調^{てう}楽^{がく}

映^{うつ}せども映^{うつ}すともなきものの色。

ただに声^{こえ}なく、

命^{いのち}なく、

鈍^{にぶ}く、重^{おも}たく、

波^{なみ}たたず、

淀^{よど}みもせなく、

なべてこれこの世^よならざる日の沈黙^{しじま}。

鈍^{にぶ}く、ぼやけし

忘^{ぼう}却^{きやく}の護謨^{ごむ}の面^{おもて}を圧^おすごとく、

掌^てに圧^おすごとく、

たまにのみ、太^{ふと}き最低音^{べース}ぞ呻^{うめ}くめる。

しかあれ、初夏^{しよか}の夕^{ゆふ}あかり、

灰^{くわい}白^{はく}色^{しよく}の雲^{くも}の裏^{うら}ゆ金覆輪^{きんぷくりん}に噴^ふきいづる

光^{がく}の楽^{がく}のさと赤^{あか}く、

照^てりかへし、湿潤^{しめり}に燃^もゆるひとときよ、

あはれ^{ひと}齊しく、はた^{たか}高く、

しめやかに、^{はな}華やかに、

^{しら}調べいでぬる^{オオケストラ}管絃樂の^{せい}生の^{きよく}曲――

かなしみに、

よろこびに、

くるしみに

^{くる}狂ひかなづる、

^{くる}狂ひかなづる、

^{くる}狂ひかなづる

^{くる}狂ひかなづる

^{くす}樟の^{がつさう}合奏……死^しのオゾン……

さてもあはれ、夜^よとならば
夜とならば如何^{いか}にかすらむ。

いま、夕^{ゆう}焼^{やけ}の^{へん}変^{あつ}圧^じ所^よ

嘲^{あざ}けるごとく、

はたや、かの^ぎ虐^{やく}殺^{さつ}の^ち血^ちを^あ浴^あびしごと、
あかあかと笑^{わら}ひくるめく……

晩夏

四十四年五月

くわと照らす夕陽ゆふひの光、
噴ふきあげ水の霧のしぶきよ。

湿しめらひぬ、蒸むしぬ、ひかりぬ、
さは、苑そのの若木のたわみ、
花の叢むら、草葉のかをり、——
さまざまの薫るおもひに。

こぼれちる水のにほひよ。
日のひかり、雲のうつろひ、

榮えしづく麝香の真珠、はまたま——
絶えず、わが夢かしたたる。

ふくらかに霧にうもれて
燃えたわむ色のうれひよ、
うつろひぬ、蒸しぬ、しめりぬ、——
ゆふぐれの胸のなごみを。

くわと照らす晩夏の光、
尽きせざる夢のしづきよ。

蝸

胸に、はた、
夕日の幹みきに、
つと来り、かなかな蝸なげく。

かなかなかな……かなかなかな……

黄金こがねなす細き旋律

せはしげに、また、かなしげに。

かなかなかな……かなかなかな……。

かくて、また鳴きつつ熟視^{みつ}む、
榮^はえあかる思より、

梢より、

実のひとつ落ちむとするを。

かなかなかな……かなかなかな……

四十一年六月

夏の夜の舟

虫^{むし}啼^なける。

りんりんすりりん……りんりんすりりん……

あはれわが小舟^{をふね}ぞくだる。
瘕^{きず}つけるわかうどの舟^{ふね}。

りんりんすりりん……りんりんすりりん……

はてもなう向^{むか}ひてかすむ

白^{しら}壁^{かべ}のほのかなる列^{つら}。

そのかげを小舟はくだる、

蒸^むし挑^{いど}む靄^{いど}のふるへに。

りんりんすりりん……りんりんすりりん……

いまし、また水路^{すゐろ}のはてに、

落ちかかる

弦^{げん}月^{げつ}あかく、

そここのくらみの奥^{おく}に

寝^ねおびれて倦^うめるものごゑ。

りんりん……すりりん……

某^{それ}の夏^{なつ}、

かかる夜^よの港^{みなと}にききし

二上^{にあが}りの音^ねじめはすれど、

あはれそをいづことわかむ。

あたりやや暗^{くら}みふけつつ、

血のごとく

顫^{ふる}ふ月^{つき}しろ

沈^{しづ}みゆくその香^かのなごり。

あなしばし、虫啼^なきしきる。

りんりんすりりん……りんりんすりりん……

りんりんすりりん……りんりんすりりん……

りんりんすりりん……りんりんすりりん……

いつしかと真闇^{まやみ}のにほひ、

深^{ふか}みゆく恐怖^{おそれ}につれて

はたと虫息^{むしいき}をひそめぬ。

蒸^むしあつし、また息^{いき}ぐるし。

.....

舟はなほ重^{おも}たくくだる。

ふと窓^{らふ}に蠟^ひの火あかり、

病^{やまうど}人の顔ぞいでたる。

内部^{うちら}には時計^{ひびき}の響。

ぎいすちよつ.....

重^{おも}き咳^{せき}ふたたびみたび、

真黒なる帷まくろ とぼりは落ちぬ。

あはれ闇夜やみよ。

ぎいすちよつ……………ぎいすちよつ……………

かくてなほ小舟をふねはくだる。

いづくにかはてなむ旅たびぞ、

そも知らね、水みづのひとすぢ、

白壁しらかべのはてしなき夜よを。

ぎいすちよつ……………がちやがちや……………ぎいすちよつ……………

たちまちに閉とざしとびらの扉、

かげ暗くらき大黒金おほくろがねの壁かべのもと、小舟をぶねはなづむ。

あなあはれ、

ものなべて見わかぬ闇やみよ、

内うちにはた悩なやみか伏ふせる

幾いくひやく百もだの沈黙おほうしの大牛。

最終いはてか、恐怖おそれの淀よどか、

舟は、あな、音なく留とまる。

りんりん………すりりん………

あらず
否、また、おのづからなる

あらがひ
抵抗のすべなき力

その水に舟押しながる。

ぎいすちよつ……ぎいすちよつ……

がちやがちやがちや……ぎいすちよつ……

がちやがちやがちや……がちやがちやがちや……

がちやがちやがちやがちや……がちやがちやがちやがちや……

はてもなう小舟^{をふね}はくだる。

大曲『悶絶』

色赤きものごゑあまた

脳^{なう}をいで、とどろと奔^{はし}る。

—

逃れゆくわれの足音^{あのと}か、

もの鈍^けき毛織^{おり}の黝^{ねずみ}

蹈^ふみにじり、蹈^ふみにじり……………

ら、りら、ら、りら、

ほのかに雲雀^{ひばり}。

あはれいま砥石といしのひびき、
鈍刀なまくらのすべるひらめき。

そのなかを赤きものごゑ
血を滴したら、とどろと奔るはし。

もの鈍き毛織けおりの夢を
蹈みにじり、踏みにじり……………

ら、りら、ら、りら、
かすかに雲雀。

はたと、あな、足音絶え入り、
ただひびく緩るく鈍刀。

しづかなる皐月の真昼、

白雲はゆるかにのぼり、
軟^{なよ}ら風ゆらにゆらるる。

ら、りら、ら、りら、

さへづる雲雀。

いづこにかいづこにか揺曳^{ゆらび}ける絃^{いと}の苦惱^{なやみ}の……

『……ああはれ、よしなや、われらがゆめぢ、

かなしきその日の接吻^{くちつけ}にも……』

緩^ゆるやかにねぶたき砥石^{といし}。

『……かなしきその日の接吻^{くちつけ}にも、

さまたげ難^{がた}かる「我」のほこり、

ひたぶる抱きて涙すれど恐怖^{おそれ}と苦惱^{なやみ}の……』

さあれなほものうき砥石^{といし}。

『……あはれ、よしなや、肉のおびえの――

汝が火のまなざし、

わが血のいどみ、

殺さむ死なむと朱に顫ふ………』

ら、りら、ら、りら、

ほのかに雲雀。

『………殺さむ死なむと朱に顫ふ………、
』

聴くとなき黒牟才ロンの火のきざし

見る見る野^の辺に渦巻きて悶^{もんぜつ}絶すれば、

くわとあがる血しほの烟^{けむり}、

そのなかをわれのものごゑ

また見えてとどろと奔^{はし}る。

忍びかにひややかに清^{きよ}らなる水のさらめき――

さらめきに角^{つのぶえ}笛あかり、

かなしみの音^ねの吐息^{といき}ほのかにおこる。

はたと、また、足音^{あのと}絶え入り、

野はなべて黄^{たそがれ}昏の色。

ほのかなるにほひのそらに、

やや赤く地平は光り、

そここの水面^{みのも}より

水牛^{すゐぎう}いづる。

水牛^{すゐぎう}のしづけさや、

しづかなる角^{つの}の音^ねに物をしおもふ。

しかあれ、鈍^{なまくら}刀の

すべる音、——砥石のひびき——

ら、りら、ら、りら、

ほのかに雲雀。

しづかにも坐る水牛、

戦慄の、かなしみの唸あげつつ、

おもむろにおもむろにあかる不思議の

いと赤き西天ながめ、

恐ろしき、あるものの迫にふるふ。

いづこにか洩れきたる牟才ロンのゆめ……

『……そぞろ、あはれ、そぞろ、あはれ

恋の帆船ほふねの――

空そらいろ色の帆もちぎれ、波にぬれて――

けふ 今日また二人ふたり、

今日また二人、

かなしき島根をさしてかへる………』

また鈍き砥石といしのひびき

かなしき光に艫ろのためいき、
 かなしき海ゆくわかき夢ゆめの
 みそらにほのめく星の光、
 ああいますべなく、われら帰る。……』

ふと起る、この面彼面もかのもに嘲笑あざわらふ人の諸もろこゑ。

『……くる
 苦しき挑いどみにせきもあへぬ
 恋慕れんぼの吐息といきに顫ふるふころ、
 嗚呼ああこのなやみをいかにかせむ。
 さあれど、すべなく帰る二人ふたり。……』

高みゆく砥石といしの響——鈍刀なまくらの増えゆくすべり——

『……あけ
朱なる接吻くちつけ、痛き怨言いたかごと、

ああまた再度ふたたび抱き泣けど……』

また近く暗き嘲笑くらあざけり。

『……ああかなし、

かなしき光、

われらの光、

内ないしん心のかなしき瞳……』

たと跳をどり逃にぐる水牛するぎう

あな、赤あかき血浴びしごとも啼き狂ひ絶望ぜつまうの唸うなりに奔はしる。

大空は見る見る月の面おもとなり、

たちまち赤き半円の盲めしひし如ごとも広ひろければ、

一時いちじに響く野の砥石、数かずかぎりなき刃はのにほひ――

はた、赤このもかのもあざき此面彼面の嘲笑わらひ……あまる空なく

おほらかに広み尽くせる、大月たいげつの恐怖おそれの面おもて、

爛ただれたる眩暈くるめき三度、くわつとして悶絶もんぜつすれば

見るが間に血^{ちけむり}煙あがり、
 逃^{のが}れゆく我^{われ}のものごゑ
 また見えてとどろと奔る。

水^{すゐ}牛^{ぎう}の声………^{せんまん}千万の砥石の響………
 苦^{にが}き嘲^{あざけり}罵………はたや、
 なほ奔^{はし}る足音^{あしおと}………

ら、りら、ら、りら、

ほのかに雲雀。

はたといま^{ろう}聾しぬる。

色……………音……………光……………

四十一年八月

大太鼓の印象

跳^{おど}りいづ、赤^{けだもの}き獣、

どんどん……………

とみかう見、円^{まろ}らに笑ひ、はた跳^{おど}る。

どんどん……………

あなやいま街^{まち}の角^{かど}より人^{まが}曲る。

どんどん……………

また来る。^{きた}

どろどろ……

赤き獸^{けもの}はふと消えて幼子^{をさなご}となり、

どろどろ……

電車線路を匍^はひめぐる。人また見ゆる。

どろどろ……

あな、うち転^{まろ}ぶ人のむれ、音^{おと}もころころ。

どろどろ……

幼子^{をさなご}のうへに重なる。また転^{まろ}ぶ。

どろどろ……

逃げんと呻^{うめ}く間^{ひま}もなく、ひびきものうく、

どんだん……………

鈍き電車は唸^{うな}り来る。はた、轢^しき過^すぐる。

どんだん……………

時に真白^{ましろ}の雲の団街^{たままち}よりのぼり、

どんだん……………

かき消^きゆる人のあとより

どんだん……………

また跳^{おど}る赤^{けだもの}き獣

どんだん……………

とみかう見^{めし}、盲^{めし}ひて笑ひ、はた、傲^{おご}る。

どんだん……………

四十一年八月

眼ふたげば

眼^めふたげば鳥^{さへづ}は囀^{さへづ}る。

盲^{めし}ひたる色赤き世界のなかに、

疲^{さへづ}れたる鳥^{さへづ}は囀^{さへづ}る。

盲^{めし}ひたる色赤き世界のなかに、

また見るは肋^{あばら}のにほひ

光なく、力なく、さあれほのめく。

あばらぼね
肋骨泣きかつ訴ふ。

『わが骨はわが骨は色あかき心の楯よ。
かくてはや終の墓碑。』

とりさへづ
鳥は囀る。

『婆羅門の婆羅門の塩を嘗めつる
咎ゆゑに昼も夜もかくは啼くめる。』
いづこにか、さはきりぎりす。

盲^{めし}ひたる色赤き世界のなかに、

力なきうめきのやから

騒^{さは}ぎ立^たち、鳥はさへづる。

はた消えてふと見ゆる顔。

その顔はあてに瘦せたるかの少女^{をとめ}。

少女^{をとめ}のなげく。

『あはれ、君、われはもや倦みも死^しなまし。
』

鳥は囀^{さへづ}る。

少女の顔はややありて白き手となり、

疲れたる、葡萄酒を注ぐ顫して

『紅き酒、そはわが血潮、

ほどほどに吸ひて去ねかし。』

鳥は囀る。

はと眼ひらけば、わがまへに赤くちりかふ

光線くわうせん ひかりたまの光の団のめくるめき。

鳥は囀る。

また眼とづれば、泣きいづる骨の揺曳、
人の顔。はた、きりぎりす。

鳥は囀る。

かうほね

きけ、あけぼのの香炉に、
連弾く夜半のそらだき

薄らひ、ほのにあかれば、

すががき
清搔、やがてもはらに

ひとつの香かうのいろのみ

薫くゆりぬ、——あはれ、水みの面もの

きぬぎぬ
後朝、——誰たをかかへすと、

さは水みなづき無月のつくゑに

香かうの火炷くや、かうほね。

青き酒

十呂盤

大いなる――

聞け、大いなる黒金くろがねの巨人きよじんの指は
絶えずわが紅玉こうぎよくの数かずの珠たまを

弄ぶ。

何時いつよりか、知らず、

左たなぞこの掌てのひらの脈搏うつ上に

水晶きうすいの星彫ほむ白壇けだの桁

横たへつ。

見るは、ただ、

蛇^{じやばら}腹^{はら}に似^たたる掌^{なでこ}の暗^{ほり}き彫^{もの}刻^く
 弾^{はじ}く指^{さし}、また昼^{ひる}と夜^よとも分^わかたぬ
 天^{そら}の色^{いろ}。

わが珠^{たま}の
 上^{あが}れば、ひとつ、劫^{がふ}の世^よに惑^{まよ}星^{ほし}うまれ、
 下^{くだ}る時^{とき}、億^{おく}年^{ねん}の栄^{えい}華^{くわ}は滅^{めつ}ぶ
 加^か減^{げん}則^{そく}。

斯^{はこび}くて、わが
 運^{はこび}正^{ただ}しき紅^{べに}玉^{たま}の妙^{めい}音^{おん}楽^{がく}は

極みある命めいすう数の大歡樂に

鳴りひびく。

光明の

大千世界ひとときに叫喚つくる

恐怖おそれの日、はた、知らず、われと音ねに酔ふ

星の桁。

聞くは、ただ、

宏大無辺天空の寂じやくまく寞遠く

筆走り、たまたまに『差引』しる記す

夢の音。

さては、また、

わかき巨人が黒くろがね金の高たかむね胸へだて

われは聞く、おほどかに鼓つづみうつなる

心しんざうの臓。

はばたき

聞けとある大海原おほうなばらのただなかは

終ひねもすおも日重きあかがねの霧たちこめて

ゆたゆたに濤なみこそうねれ、日輪は
 凄まじ、黒き血の塊くれと焦げて暈くるめく。

みるかぎり赤道下の炎熱に

鉛のごとき鹹しほみづ水は炎と燃えて、

海蛇うみへびの鎌首高く、たまたまに

煌きらめき、さてはぶぶぶと青く沈みぬ。

物なべて気け懶だるし重し、わだのはら

溶とろけたゆたふ鬱憂とろのうねりに疲れ

夜のごとも深まる吐息。しかすがに、

大寂靜だいいじやくじやうの空高く濃霧のうむをわけて

東より靈智の光しらしらと

見え、かつ、消えぬ、大鳥おほとりの強きはばたき。

青き酒

青き酒、——

など、汝いは否なむ。これやわが深みの炎ほのほ、

また永久とほの秘密しるしの徴、われと聴く

激しき恋の凱歌かちうたに沈みにし色。

ただ刹那、

千年に一度現るるかの星こそは、

われとわが醸みにし酒の火の飛沫、

濃き幻のしたたりに天さへ燂けむ。

こを飲まば

刹那の刹那、歎く血の歓楽にこそ、

痛ましき封蝟色の汝が胸も、

焦げつつ聴かめ、

この夜半に音なく響く管絃楽、

虚無より曳ける青き火の丈長髪を。
たけながかみ

空罌

葡萄酒罌の上包、
うはづつみ 霊なるころも、
たま

何の魔か、飽くなき慾の痙攣もて
ふるへ

かく引き裂り、むぎむぎと歩み棄てけむ。
ちぎ

火の片ぞ素足にわれと泣かしむる。
きれ

—

いづくに行かば得らるべき命の糧ぞ。
かて

踏むはただ鉛の路の火の飛沫、
しぶき

死の色つづく高壁たかかべのつらねのそこを

蟻のごと匍ひもとほらむ末のすゑ。――

たちまち薫る酒の歌、蒸すかと見れば

赭あかほら頬おもひの想の族らとりどりに、

はや、酔ひしれて狂たはれきぬ、あな、わが血にぞ。

かくて、見よ、わが幻まぼろしに転ぶもの

吸い尽くされし空からの鑊びん、――空からなる命、

最終いやはての辻おそれの恐怖に、ふと青む。

炎上

焦げに焦がるる我^{わがこころ}心、そことしもなく聞ゆるは
 しふちやく
 執^し着^くの日の喚^{さけび}叫^{こゑ}、黒ずむ悪の火の羽ぶき、
 あぶらひでり
 油日照^{よつつじ}の四辻は凄惨として音もなく、
 雲なき空に電流の渦まき消ゆる断末魔。

もそろもそろに滞^{とどこほ}る鉛の電車、一^{ひと}片^{ひら}の
 命の紙と蠟づけの薄葉鉄^{ぶりき}の人を吊るしつつ、
 黒き煉瓦の息づみにひたぶる咽^{むせ}ぶ輪のほめき。
 事こそ起れ、いづこにか、早鐘すらむ物の色。

驚破、炎^{えんじやう}上の火の光、見れどもわかぬ日ざかりに
 みるみる長く十字劃^かきみすくむ帯の^{さなだいろ}色、
 あなと、昏^{くら}めば、後^{しりへ}より、憂^{かつかつかつ}憂^{だく}とふませ、

隙^{すき}こそあれや、たとばかり、鞭^{むち}ひらめかし、^{まつしぐら}慕然、
 黒^{くろ}き甲^{かぶと}と朱の色の蒸^{ぼむぶ}汽^き唧筒の馬ぐるま、
 跳^{をど}りぞ過ぐれ、湯は釜に飛^{しぶき}沫くわつくわと沸^{たぎ}りたる

紅火

夜なり。二人、臨終の寝椅子に青み、むかひめて
 毒酒を杯に。紅の燭こそ点せ。まのあたり、
 無言に凝視め赫耀の波動を聴けば、夢心地、
 浄華のわかさ、身も霊も紅く纏るる赤熱よ。

火は葡萄染の深帳、花毛氈や、銀の籠、
 また、羅のころも、緑髪、わかき瞳に炎上の
 句香熱く、『時』の呼吸、瞬き燻る『追懷よ。
 『恋』は華嚴の寂寞に蒸し照る空気うち煽る。

時経ぬ唇は『樂欲』の渴に焦れ、心の臓

喘あへげば、紅こうくわ火『煩ぼんなう悩』の血彩ちいろくん薰くるめきずる眩暈めきよ。
 朱しゆの蠟ろう淚るいは毒どく杯はいの紫むらさ擾やうだし照しづり雫しづく。

今ろふこそ蠟ろうは琤はうろう瑯ほうろうに炎ほのほのころもひき纏まとひ、
 音おとなく溶とくる白びやく熱ねつに爛ただれ艶えんだつ弱よわごころ、
 無言むごんに泣なけば『新しん生せい』の黄わう金ごん光くわうぞ燃もえあがる。

暮愁

暮ぼれぬらし。何い時つしか壁はも灰は色いろに一ひと室まはけぶり、
 盤ばん上じやうの牡ぼ丹たん花くわひとつ血ちのいろに浮たび爛だれて、

散るとなく、心の熱も静寂の薫に沈み、
 卓の上両手を垂れて瞑目れば闇はにほひぬ。

窓の外は物古りし街、風湿める香のぬくみに、
 寺寺の梵音うるむ夕間暮、卯月つごもり、
 行人の古めく傘に、薄灯照り、大路赤らみ、
 柑子だつ雲の濡いろ、そのひまに星や瞬く。

わが室は夢の方丈、匂やかに名香なびき、
 遠世なる暮色の寂に哀婉の微韻を湛へ、
 髣髴と女人の姿光さし続く幾むれ、

白鳥はくてうの歌ふが如く過ぎゆきぬ、すべる羅らの裾。

そのなかに君は在おはせり。緑みどり髪がみ肩に波うち、

容顔すがの清しき、胸ばらいろに薔薇色の薄ぎぬはふり、

情界の熱き波瀾に黒くろ瞳ひとみにほひかがやき、

領巾ひれふるや、夢の足なみ軽らかに現うつなきさま。

ああ、それも束つかの間なりき。花祭ありし夕ゆふか、

群衆ぐんじゆうのなだれ長閑かに時は花歌街やりうたまちを流れて

辻辻だに山車だし練る日なり、行きずりに相見しばかり、

高華なる君が風雅みやびも恋ふとなく思ひわすれき。

今行くは追憶おもひでの影——黄金なす幻追ひて、
衰残の心の大路暮れゆけば顧みおほぢもせぬ
人生の若き旅びと、——くづをれて匂ゆかしみ
我愁ふ、追慕の涙綿綿と青む夜までも。

乱れ織

無花果の園

なにか泣く、野より、をとめよ、

無花果いちじくの汝なが園遠く

われは来ぬ。いざ眼をあげよ。

今日けふもまた葉かげ、実みがくれ、

甘き香の風に日あびて

語らまし。いざ手を交せ。

さは泣くや、夜にか、をとめよ。

汝なが園は焼けぬと。草も、

無花果いちじくの樹も実も無しと。

おお、なべて園はいたまし。

葉も幹も、ああ、実も香もか、
草の床——恋の巢までも。

さあれ、よし。白帕やはに

うるはしき汝が頬の涙

まづぬぐへ。すみれのにほひ。

曾て汝は春のほこりに、

なに誓ひ、いづれ惜みし

この恋と、その古園と。

ああ、園は野火のびに焼かれて
 今は無し。——美うまし追憶おもひで
 ただ胸の香かにこそにほへ。

さば尋とめむ、恋こひの歓よろこび樂。
 今日けふよりは、野山のやまに、谷たにに、
 百合ゆり、さうび、花はなの日の榮ひはえ。

ああ、かくて、終つひの愛あい欲よく。
 火ひと燃もえて身みを焼やく夜よにも、

汝^なは泣^なくや、
いかにをとめよ。

燕

燕^{かけ}は翔^みる、水^{なづき}無^な月の

雲^{はたて}の旗^{はた}手の濡^ぬ髪^はに。
—

暗^くき港^{みなと}はあかあかと

霽^はれぬ、滴^{したた}る帆^はの雫^{しずく}。

燕^かは翔^ける、居^い留^{りゅう}地の

柑^{かん}子^じ色^{いろ}なす
窓^{まど}玻^が璃^{らす}

ななめに高く。——ほつほつと

霧に湿しめらふ火のにほひ。

燕は翔かける、葉煙草と

斗才ロン薫くゆる和蘭おらんだの

酒楼のまへを。——笛あまた

暮れつつ呻によぶ海の色。

燕は翔かける、花柘榴はなざくろ——

濡るる埠止場の火あかりに。

かくてこそ聴け、艶やしよめ女等が

猥^{みだ}らにわかきさざめごと。

珊瑚切

ひる
午さがり、

渚^{なぎさ}に緩^{ゆる}き波の音。

をとめ
少女はやがてあてやかに

『何^なぞ。』と答^{こた}へぬ、伏^{ふしめ}眼して、

紅き珊瑚の枝あまた

撰^{えら}みつ、切りつ、かろらかに

鋸の齒のきしろへば、

ほそき腕かひなと頬ほのうへに

薔薇ばらいろの靄もろさとけぶる。

ややありて、

渚なぎさに緩ゆるき波の音。

男は燃もゆる頬ほを寄よせて

『君をおもふ。』と忍しのびかに、

さては手速てはやにうしろより

珊瑚細工の車の柄え

かろく廻まわせば、ためらへる

白しろの上衣うはぎと髪かみの毛けに

薔薇ばらいろの靄さとけぶる。

のびやかに

なぎさ

渚に緩き波の音。

をとめ

少女は、さいへ、あからみて

『吾も。』とばかり、海の日を

玻璃に透かしつ、やうやうに

かたち

形ととのふ恋の珠

たま

磨きつ、吹きつ、をりをりに

くるま

車まはせば、美しく

薔薇いろの靄さとけぶる。

乱れ織

——天草雅歌——

わが織るは、

火の無花果いちじくを綴りたる

花哆囉はなとろめんの猩猩しやうじやうひ緋。

とん、とん、はたり。

さればこそ

絶えず梭燃え、をさ乱れうつ

火の無花果いちじゆくの百済琴くだらごと。

とん、とん、はたり。

聞き恍ほれて、

何時いつか、我が入る、しやうじやうひ猩猩緋

花哆囉はなとろめんのまぼろしに。

とん、とん、はたり。

乱れ織、

落つる木の実のすがきに

ふとこそうかべ、銀の楯。

とん、とん、はたり。

翻へす

貝ばいたらえふ多羅葉の馬じるし

花はなとろめん哆囉のまぼろしに。

とん、とん、はたり。

また光る

白かぶとき兜まちまんざの八幡座、

火の無花果いちじゆくの百済琴くだらごと。

とん、とん、はたり。

乱れ織、

つと空ゆくは槍つらの列。

花哆囉はなとろめんのまぼろしに。

とん、とん、はたり。

さては見つ、

火の無花果いちじゆくのすががきに

君が鎧しやうじやうひの猩猩しやうじやうひ緋。

とん、とん、はたり。

われは、また

花哆囉はなとろめんのまぼろしに

白き領巾ひれふる。百濟琴くだらごと。

とん、とん、はたり。

そのときに、

馬は嘶く、しらしらと、

火の哆囉とろめんの無花果いちじゆくに。

とん、とん、はたり。

あはれ、いま

はなとろめん
花哆囉のすががきに

再び擁く、君と我。

とん、とん、はたり。

そら
天も見ず、

かつ
被ぐは滴る蜜の音、

しやうじやうひ
君が鎧の猩猩緋。

とん、とん、はたり。

こは夢か、

刹那か、まぼろし尽きぬ幻か、

はなとろめん花哆囉をさの梭の音。

とん、とん、はたり。

高機

——天草雅歌——

たかはた高機に

梭なげぬ。

きり、はたり。

その胸に

梭なげぬ。

きり、はたり。

その高機に、

その胸に

きり、はたり。

顛末

——天草雅歌——

『花ありき、われらが薔薇^{さうび}、
摘まれにき、われらが薔薇^{さうび}。』

かくて、また、何時^{いつ}としもなく

凋みにき、われらが薔薇^{さうび}。』

あはれ、炉^ろに凭^よればかならず、

顛^{もとすゑ}末はかかりきといふ

わが媼をうな、その日の薔薇さうび、

『何ゆゑ。』と問へば、かくこそ、

火にいぶる紅しき鞆たうづ

つと退ひきて噎むせ入りながら、

『子らよ、そは、ああ、その薔薇さうび

あまりにも紅あかかりしゆゑ。』

ためいき

今しがた、夜やくわい会かいははてぬ。

花は瓦な斯がのほそきなげきに

絹きぬ帷とばり紅あかき天鵝絨びろうど、

散ちり藉しける花束はなたばのくづ、

おぼろげに室むろは青あをみて、

うらわかき騎士きしが拍車はくしゃの

音ねの乱みだれ、舞まひの足あしぶみ、

頬ほのほてり、かろきさざめき、

髪かみあぶら、あはれ、樂がく聲しやう、

あたたかに交まじりみだれて

ゆめのごと燻くゆりただよふ。

そのなかに、水みづのつめたさ

ちらほひぬ、これや、一夜をひとや
つれ伴もなく青あをみしなへし
をみなご女子がわかきためいき。

時鐘

身にか沁しむ。——『わが世がたりも
 はや尽きぬ。きよう興もなき事。こと
 わかうどよ、あか紅き炉ろの火に
 美しき足袋をな焼きそ。
 かの宵の恋にもまして

うそ寒き夜にもあるかな。』

老嫗をうなかくつぶやきながら

力なう柴折りくべぬ。

そともには雪やふるらむ。

燃ゆる眼にわかきは見あげ、

言葉なく、またうつぶきぬ。

ひとしきり、沈黙しじまやぶれて、

煤すすけたる江戸絵の壁に

禁軍の紅帽こうぼうあかり、

はちはちと火ひの粉飛ことびちり、しづまりぬ。

九時にかあらむ。

ああ今、目白僧園の鐘鳴りやみぬ。

若し

炉^ろの椅子に我ありとせよ、

また火あり熾^{さか}れりと見よ。

棚^への上の小さき自鳴鐘^{めざまし}

鳩いでて三つと鳴かぬ間、

わが唇^{くち}は汝^{うな}がくちに、

頸^{うな}まき、ただ火のもだえ、

また鞆^{たび}の焦ぐるも知らね、

さいへ、夏、我やはた、
火の気^けなき炉^ろに椅子もなし、
人妻よ、安かれ、汝^{なれ}も。

たはれ女

『やよ、しばし、

そのうつくしきわかうどよ、

君はいづこへ。』 『君は、など。』

『美^{うましを}男、あはれ、いつの日か

君に見えけむ。』 『しかはあれ、

われはえ知らず。』『さな去にそ、

その御瞳^{みひとみ}のうつくしき、

いかで忘れむ。』『さあれ、など、』

『まづ、おきたまへ、原のぬし?』

『いな、』『さは知りぬ、蜂須賀の

君か。』『いな、いな。』『ほ、ほ、さても、

御歳^{みとし}は。』『十九。』『はしけやし、

法科のかたか。』『いな。』『いなど、

さらばいとよし。さて、君は

いづこへ。』『麻布、君は、また。』

ほほ、わすられぬ情^{こひびと}人を

招ぎに。』とばかり、かたへなる

自働電話の火のとびら

たわやに開^あけて、つと入りぬ。

驢馬の列

——かかる詩の評家に——

驢馬の列^{つらねまち}ぞ街^{まち}をゆく。

見よ、のろのろの練^{ねりあし}足に、

鼻も眼もなきひとやから

載せて、うなだれ、呻によびたる。

驢馬つらねまちの列ぞ街を行く。

鳴くは通草あけび へんげの変化らか、

また、耳もなきひとやから

口のみあかくただれたる。

驢馬つらねまちの列ぞ街をゆく。

あはれ、終ひねもす日、手さぐりに

生なまはひいろ灰色の怪けのやから、

のへらのへらと鞭ふれる。

驢馬つらねまちの列ぞ街をゆく。

もとより、人の身ならねば、

色いろもにほひも歌うたごゑも

嗅かぐすべはなし、罵ののしれる。

驢馬つらねまちの列ぞ街をゆく。

ただ戸かどに咲はなける罌粟けしひとつ

知らえぬ汝等なれら、いかで、さは

深やかたき館ないしんの内心を。

驢馬の列つらねぞ街まちをゆく。

すでに罵る汝なが敵あだは

はくば

白馬に抱く火の被衣かつぎ

せんり

千里かなたのくちつけに。

落雷

落雷

静まりてなほもしばらく

霧のぼる高原たかはらつづき

爛ただれたる「時」ははるかに、

恐ろしき苦悩をはこぶ。

驟にはかあめ雨 またひといくさ、

走りゆく雲のひまより

かるやかに青ぞら笑ひ、

日の光強く眩しく

野はさらに酷熱のいろ。

腥なまくさきオゾンのにほひ

雫しづくする穂麦のしらみ、

今裂けし櫟けやきの大木おほぎ

燥^いるがごと疼^{うづ}くいたでに
脂^{やに}黒くしたたるみぎり、

油蟬ぢちと鳴き立つ。

根がたには蝮^{まむし}さながら

髪あかき乞^{こつじき}食ひとり

仰向けに面^{めん}桶^{つう}つかみ、

見よ、死せり。雷^{らい}火^{くわ}にゆがむ

土いろの冷^{ひや}き片頬に

血の雫——濡れて仄めく

一輪の紅きなでしこ。

長月の一夜（初稿）

長月の鎮守の祭^{まつり}

夜もふけて天は陰^{そら}しく

雨もよひ、月さしながら

稲妻す、濃雲をりをり

鉛いろ赤く爛れて

野に高き軌道を照らす。

このあたり、だらだらの坂
赤楊^{はん}高き小学校の

柵尽きて、下は黍畑

こほろぎぞ闇に鳴くなる。

いづこそや、女声して

重たげに雨戸繰る音。

大師道、辻の濃霧は、

こぎり

馬やどのくらめきあかりに

幻燈のぼかしの青み

蒸しあつく、ここに破馬車

やれ

七つ八つ泥にまみれて、

ひつそりと黒う影しぬ。

泥^ぬ凜^{かるみ}は物の汗ばみ

生^{なま}ぬるく、重き空氣に

新らしき木^{もく}犀^{せい}まじり

馬^{うま}槽^{ぶね}の臭^{くさ}氣^みふけつつ、

懶^{もの}うげのさやぎはたはた

夏^なの夜^やの悩^{なや}を^み刻む。

足音す、生血のにじみ

しとしとと、まへを人かけ

おちうどか、はたや乞食か、

背に重きどうらん佩囊になひ、

青き火の消えゆくごとく

呻きつつ闇にまぎれぬ。

嗚呼おそれ今か畏怖の極み、

がちやがちや轡虫は調子はづれに

噪わめきつつ、はたと息絶え、

落ちかかるこがね黄金の弦ゆづる

心臓あへぎの喘あへぎさながら

また黒きひつぎ柩ひつぎにしづむ。

終列車とどろくけはひ。

凄まじき大雨のまへを

赤煉瓦高きかなたは

一面に血潮ながれて

野は紅く人死ぬけしき、

稲妻す、——嗚呼夜は一時。

蹠

海ちかき真闇の狭間、

夜の火の粉まひふるなかに

酒の罎^{びん}とりて透かしぬ、

はしりゆく褐^{くろいろ}色の顔、

汽車ぞいま擦れちがひぬる。

かたむけぬ、うましよろこび、

いな、胸にしらべただるる

煉獄の火のひとしづく。

時に、誰^たぞ、こん、こん、か、かん、

槌^{あなうら}つらね、蹠^{あなうら}うつは。

糸崎と子らがよぶこゑ。

そぞろありき

風寒き師走月、しはすづきその港を

われひとり、夕暮のそぞろありきす。

薄闇のほのかなる光のなかに

老舗立つひと町は寡婦のやしなごとく

われゆゑに面おもがは変り、かくや病みけむ。

人あまた、はかなげにそともながめて

石のごと店みせに青みすわりき。

たまたまに、灯あかりさす格子かうしはあれど

柩ひつぎうつち槌おとの音ただにせはしく、

煉瓦あきちつむ空地には、あはれ誰が子ぞ、

心^{しんぢう}中の数へぶし拙^{つた}なげながら
 音^ねもうるむ連弾^{つれびき}のかなしきしらべ、
 いっになく旅人の足をとどめて、
 灯^ひは青く柳立つ闇にともりき。

港には浪の音^ねも鈍^{にぶ}にひびらぎ、
 灰だめる氷雨^{ひさめぐも}雲空にみだれて
 すそあかる黄^{あめ}いろの遠^{をち}に、海鳥^{うみどり}
 煙濃^{けぶりこほばしら}き檣の闇^{ひとつら}に 一列

朱^{しゆ}の色の大き旗鳴きもめぐりぬ。

船はまた鐘鳴らし、かくて失^うせにき。

そのゆふべ君のかげ消えしかなたに、
さてもや、みえそめぬ海のかなたに
けふも見よ、木星の青ききらめき。

暗愁

なにごとぞ、夕まぐれ、人はさわさわ、
新開しんかいのはづれなる坂のあき地に
うづくまる。そこ、ここに煉瓦れんぐわ、
石灰いしばひ、
高草たかくさの黄きにまじり、風ぞ冷えたる。

灰色のまろき石子らはまろがし

据ゑ、やをら爪立ちぬ、爺が肩より

のぞき見す。——様様のくらき呼声

世のほかの町の闇ひさぐ気遠さ。

古井あり、桁はみなくづれゆがみて

桔槔ギロチンの骨とそびやぎ、

血はながる。赤ばみし蛇のぬけがら

さかしまに下はこれ暗き死の洞。

人はみなめづらかに首つきいだし

おづおづと環わぞ退しぎる。あはれ男子をのこら

三人みたりまで影薄う青み入りぬれ、

そよとだに腰綱こしづなの端はしもひびかず。

時や疾とし、ひよろひよろの青洋服あをやうふくは

わと前おもへ面がはり、のめり泳ぎつ。

と見ぬ、いま、むくむくと臭き瓦斯かの香

町おほや蔽ふ、みるがまに黄ばむ天そらいろ色。

驚破すはと、見よ、街道へまろびなだれて

西日する町の屋根、高き耶蘇寺でら、

ふりあふぎ人はみな面冷えぬれ。おもひ

風さらにひややかに草をわたりぬ。

灯ぞともる、支那床の玻璃に人見え、どこ

あかあかと末広すゑひろに光凍れば、ひかりほ

古煉瓦ふるれんぐわうづだかき原のくまぐま、

ほそぼそとこほろぎの鳴く音洩れぬる。ね

地獄極楽

『御覧ぢやい、まづ。』と濁だみこゑ

屋根低き山家の土間は

魚燈油のくすぶり赤く、

人いきれ、重き夜霧に

朦朧と地獄の光景けしき

げん現じいづ。―あはれ鞭指さし、

案内者あないしやは茶いろの頭巾

殊勝げに念仏ぞすなる。

木戸にまた高く札うち、

はすは蓮葉なる金かなきり切ごゑと

老いたるが絶えず客よぶ、
――

と見る、ただ赤丹剥あかにはげたる

閻魔王、青き牛頭馬頭ごづめづ、

講釈のなかばいちどに

がくがくと下したあご顎鳴らす。

――

『評判の地獄極楽。』

胸わるき油煙のにほひ

女子らが汗に蒸されて、

焦熱のころあかあか

火の車、または釜うで、

餓鬼道の叫喚わめきさながら

人人が苦悩を醸す。

さはれ、なほ爺おぢは真面目まじめに
諳誦す、業ごふの輪廻りんねを。

孟蘭盆の寺町通、

猿芝居幕のあひまか

喇叭節みだらに囃はやす。――

うち湿しめる沈ちんの青みを

稚子ちごあそぶ賽さいの河原は、

長長と因果こそ説け、

『なまいだぶ。』こゑもあはれに、

かたのごと、涙を流す。

ひと巡り^{めぐ}、はやも極楽、

絵灯籠紅^{あか}き出口は

華やげ楼閣そびえ、

頻伽鳥^{びんがてふ}鳴けり。この時、

酒の香^かす、懷^{ふところ}がくり

徳利嘗め、けろり鐸^{すず}ふる、

太鼻の油汗見よ。

『先^{せんさま}様はこれでお代り。
』

熊野の烏

夜は深し、熊野の烏

旅籠はたごの戸かたと過ぐ、

いっしゆんじ
一瞬時、——燈火青に

をおほ蔽ふかぐろの翼つばさ

あほうは
煽り搏つ羽うらを透かし

消えぬ。今、森しんとして

冷えまさる恐怖おそれの闇に

身は急に潰つぶゆる心地こころ。

「変らじ。」と女をみなの声す。

ひと呻うめく、熊野の烏。

うしみつ
丑満の誓請文

今か成る。宮のあなたは
忍びかに雨ふりいでぬ。

『誓ひぬ。』と男の声す。

刹那、また、しくしくと

痙攣^{つりかが}む手脚のうづき、

生^{いけにへ}贄^{くつう}の苦痛か、あなや、

護符ちぎる呪咀^{のろひ}のひびき。

はたと落つる、熊野の鳥。

と思へば、こは如何^{いか}に、

身は烏、くちばし嘴黒く

黒金の重錘おもりの下に

羽平はねひらみ、打つぶ伏すふ凄さ。

はた、固く、痺しびれたる

血まみれの頭脳づなうの上ゆ、

暗懨すくと竦すくまりながら

魂たまはわが骸むくろをながむ、

我

時は冬、霜しもつき月下げじゆん旬、

夜の一時、真闇の海路。
よ いちじ まやみ うなぢ

玄海か、朝鮮沖か、

知らず。ただ波濤の響
はたう

だうたふ 鞆と窓うつ暗さ。
くら

門司いでて既に幾時。
もじ いくとき

いとど蒸す夜来の空は、
やらい

雨交り雹さへ乱れ、
まじ

灘遠く雷するけはひ。
なだ らい

不安いま、黒き旗して
ふあん はた

死の海を船ゆく恐怖、
おそれ

深沈の極み真黒に
しんちん きは まくろ

点てんしょう鍾しやうの悲音ひおんたまたま、

天候てんこうの險悪けんあくいよよ、

闇あんたん懺さんとわが夜はくだつ。

一室いつしつに見知る顔なし。

何ごとぞ、宵よひのほどより、

紅毛こうもうの羅面らべい絃弾者かひきは

白眼しろめむき絶えず笑へり。

陰翳いんえいは彼あが肋ばらに

明暗めいあんす一張いちやう一弛いつし、

カンテラの青み吸ひつつ、

縞蛇しまへびの喘あへぐが如し。

深夜しんやなり。疫病えきびやう顔がほに、

衆しゆうじん人は疲れ黄ばみて

錢ぜにひとつとつ投なぐる者なし。

乱撃らんげきよ、早鐘はやかね急に、

甲板は靴音高く、

『驚破すは。』『風ぞ』『誰たそ巻け』『倒せ。』

『綱投つなげよ。』一時に水夫かこら

狼狽ろうばいの銅羅どらこ声擾ごみだし、

『飛沫しぶき』『それゐるな』『立て。』と

口口に、巻き、投げ、昇り、

立ち騒ぐ刹那か、颯と

暴風の襲来迅く、

帆の半、帆ばしら、帆桁、

折れ、唸り、はためき、倒れ、

動揺す、奈落へ、天へ、

激瀾おほなみの鳴号淒く

轟轟ぐわうと頭上に下に、

刻刻の不穩等ひとしく

一室は齒の根もあはず、

惨たりな、垂死すゐしの境さかひ。

紅毛は笑ひつつあり。

ふと見れば何らの贅^{にへ}ぞ、

わが膝は眩^{まば}ゆきばかり

乱^{らんばつ}髪の女人に温み、

華奢ながら清き容顔

夢^{ゆめ}みるか、青うゑまひぬ。

恋びとか、あはれ、抱けば

軽^{けいなん}軟の吐息すずろに

頬^{ほほ}触れぬ、薔薇^{さうび}のにはひ。

嗚呼^{しばし}暫時流離の胸も

脈絡の炎に爛れ、
ほのほ

痛楚なる人が呻吟も、
うめき

念仏も悲鳴も知らず、

情界の熱き愉楽に、

わが靈は喘ぎ焦がれぬ。
れい あへ こ

何ごとぞ、一時に音し、

毬のごと五体は飛べり。

瞬く間、危急の汽笛

一斉の叫喚——うつつ、
せい けう ぐわん

秒ならず、後甲板は
べう こう かん ばん

懸命の格闘黒く、

『咄^{とつ}、放せ』短艇^{ボウト}に魔あり、

櫂あげて逃路を塞ぐ。

目前の障^{さまたげ}碍——知らず

紅毛か、水夫^{かこ}か、女か、

他人なり——死ねやとばかり、

発止^{はつし}、余は短銃^{ピストル}高く

一発す、続いて二発、

三発す。あはや横波

驀^{まつしぐら}地頭上を天へ、

舳^{ちく}なかなば傾く刹那、

しやしやしやしやと水晶簾ぞ

落下すれ、苦鳴もろとも

闇中の渦卷分時、

微塵なり。——水天裂けて

髣髴と白光走る。

眼ひらけば、小春のごとも

麗らかに空晴れわたり、

身辺は雑木疎ざわきまらに、

名も知らぬ紅花叢むら咲き

涼すずかぜ風の朝吹く汀、
みぎは

砂雲雀優すなひばりにあがれり。

ああ、神よ、他人は知らじ、

我はわが生命いのちの真珠

全きを今もながめて、

満腔の歡喜よろこび高く

大音に感謝しまつる。

吐血

罌粟畑けしばたけ日は紅紅あかあかと、

水無月の夕雲あか爛れ、

鳥鳴かず。顔火のごとく

花いづるわかうど一人^{ひとり}、

黒漆のわかき瞳に

樂^{げうよく}欲の苦痛を湛へ、

大跨に一步ふりむく。

極熱の恋慕の郊野

蒼然と光衰へ、

草も木も瀕死の黄ばみ、

夜のさまに凄惨たりや。

う、とばかり、刹那膝つき、

絶望に肺はやぶれて

吐息しぬ——くれないの花。

柑子咲く国

南国

ああ、君^{かへ}帰れ、故郷の野は花咲きて
わかき日^{さつきかうじ}に五月柑子の黄金^{こがね}燃え、
^{そら}天の青みを風ゆるう、雲もののどかに
薄べにの^{ふるや}もとほりゆかし。——^{かへ}帰れ君、
森の古家の^{しんく}蔭かづら花も真紅に、

ひるが

翻へれ、君はいづこに、——北のかた

ひつぎ

柩まうけの媼さび、白髪まじりの

かんねぶつ

さか

びく

寒念仏、賢し比丘らが国や追ふ。

うついう

ふ

な

そら

な

そら

な

そら

な

そら

な

そら

な

そら

な

そら

な

そら

な

そら

な

そら

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

くちあま

い

やめ

い

やめ

い

やめ

い

やめ

い

やめ

い

やめ

い

やめ

い

やめ

い

やめ

い

やめ

い

やめ

はたけ

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

畠

の

林

檜

紅

鯁

えて

蛆

こそ

た

か

れ

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

帰

れ

、

君

、

——

筑

紫

平

の

豊

麗

に

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

し

ろ

あ

ぶ

み

し

ろ

あ

ぶ

み

し

ろ

あ

ぶ

み

し

ろ

あ

ぶ

み

し

ろ

あ

白

が

ね

、

わ

か

駒

の

騎

士

も

南

へ

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

旅

役

者

、

歌

の

巡

礼

、

麗

姫

、

奴

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

絵

だ

く

み

、

う

つ

ら

練

り

続

け

、

な

か

に

一

人

は

た

け

は

た

街

道

や

藤

の

茶

店

の

紅

き

灯

に

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

街

道

や

藤

の

茶

店

の

紅

き

灯

に

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

街

道

や

藤

の

茶

店

の

紅

き

灯

に

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

街

道

や

藤

の

茶

店

の

紅

き

灯

に

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

街

道

や

藤

の

茶

店

の

紅

き

灯

に

は

た

け

は

た

け

は

た

け

は

た

暮れて花揺る馬ぐるま、鈴の静けさ、

四とせぶり、君も帰らふ夕ならば

靄の赤みに、夢ごころ、提灯ふらまし。

朝ならば君は人妻、野に岡に、

白き眼つどへ、ものわびし、われは汀の

花菖蒲、風も紫の身がくれに

御名や呼ばまし、逢見初め忍びしわかさ

薄月に水の夢してほそぼそと、

ああさは通へ、翌の日も、山吹がくれ

雨ならば金糸の小蓑、日には、

一の鳥居を野へ三步、駒は木槿に、

露凍つゆしみの忍び戸ど、それもほとほと

牡丹花ぼたんくわちらぬほど前へ、そよ小躍をどれ

薔薇いばらみち、蹈めば濡羽ぬれはのつばくらめ、

飛ぶよ外との面もの花はな麦むぎに。

あれ、駒鳥うまどりのさへづりよ。

籬根まがき近し、忍び足、細くちら口ふえ笛

琴やみぬ、衣きぬのそよめき、さて庭へ、

(それと隠れぬ。) そら音ねかと、(空は澄みたれ、

また鳴ならす。) ほほゑみ頬ほほに、浮うけあゆみ

棟あふちかしは、柏かしはの薄ら花ほのにちる日ひの

君ならばそぞろ袂もかざすらむ。

はや午さがり、ひる かたをか片岡の畑はたに子ら来て、

早熟はやなりの和蘭覆盆子おらんだいちごべに紅や摘む

歌もうらうら。——風かざぐるま車めぐる草家くさやは

鯉のぼり吹きこそあがれ、ここかしこ、

里をんなの女は山梔くちなしの黄にもまみれて

糯もちや蒸むす、あやめ祭のいとなみに

粽ちまきまく夜のをかしさか、頬ほにも浮うかべて

わかうどは水ゆふべに夕まの真菰もがり刈、

いづれ鄙びの恋もこそ。

君よ。われらは花ぞのへ、

夕ゆふばえあつ栄べにげし熱かき紅罌粟かくの香にか隠れて

つつゐ 筒井づつ 振りわけがみ 振分髪の恋慕びと

きめれ 君吾燃ゆる眼もひとと、頬ずりふるへ

をさ おもひで そのかみの幼な追憶——君知るや

こひがたり フランチエスカの恋語——胸もわななけ、

ひとづま 人妻か、罪か、血は火の美しさ、

あつ 激しさ、熱さ、身肉の爛れひたぶる

いだ ひし くちつ かき抱き犇と接吻け死ぬまでも

忘れむ、家も、世も、人も、

ああ、南国の日の夕。

恋びと

ああ七月、
しちぐわつ

山の火ふけぬ。——花柑子咲く野も近み、
はなかうじ

月白ろむ葡萄畑の夜の靄に、
ぶどうばたけ

土蜂の羽音、香の甘さ、青葉の吐息、
すかる はおと か

情慾の誘惑深く燃え爛れ、
いざなひ

仰望ば空の七つ星紅く煌めき、
なな ほしあか きら

南国の風さへ光る蒸し暑さ。

はや温泉の沈黙——烏樟の繁み仄透き灯も薄れ、
ゆ しま くろもじ ほのす ひ

歡語絶えぬ。——湯気白う、
さざめき ゆげ

丁字湯薫る女の香、湿りただよひ
ちやうじゆ をんな か しめ

わが髪へ、吹けば艶えんだつ草生くさぶなか。

露みな火なり。白百合は喘あへぎうなだれ、

花びらの熱ねつこそ高め。頬ほに胸に

ああ息づまる驕けうらく楽の飛沫しぶきふつつ

抱だきしめ擁に人死ぬにほひ、血ちも肉にくも

わななきふるふ。

ああ七しちぐわつ月、

ふと、われ、ききぬ——忍あつび足熱あつきさやぎを

水枝みづえ照る汀みぎはの繁木しげきそのなかに。

さは近づくは黄金こがねがみ髪、青きひとみか、

また知らぬ、亜麻いろ髪か、赤ら頬か、

ああ、そのかみの恋人か、謎の少女か。

遠つ世の匂香あまき幻想に

耳はほてりぬ。うつうつと眼さへ血ばみて、

極熱の恋慕胸うつくるほしさ。

風いま燃えぬ。ゆめ、うつつ、足音つづきぬ。

身肉のわづらひ、苦き乳の熱に

汗ばみ眠れば心の臓、牡丹花の騒ぎ

瞬く間、あな頬は爛れ、百合のなか、

七尺走る髪之音、ひたと接吻け、

紅の息、火の海の、ああ擾乱や、

水脈曳き狂ふみをひ爛らんくわう光くわうに、五体ごたいとろけて
 身は浮きぬ。ぼたんくわ牡丹花ひとつ、血ちの波なみを焦こがれつ、沈しづむ。

霊場詣

行けかし、さらば南国ばんの番みの御寺へ。

春なれば街まちの少女をとめが華はなやぎに、

君も交りて美しう、恋きせいの祈誓の

初旅はつたびや笈おひずる摺すすがた鈴すずふりて、

大野おほののみなみ、菜の花こがねつみすの黄金海透く

筑紫つらみち列つらもあえかのいろどりに

御詠歌流し麗うらと練りも続く日、

軟かぜに絵日傘あぐる若菜摘、

法師、馬上の騎士たちも照りつ乱れつ

菅笠に蝶も纏るる暖かさ。

はじめ御山の清水寺。

風雅古る代の絵すがたか、杉の深みの

薄ざくら花も散りかふ古みちを、

六部、道心、わか尼のうれひしづしづ

鉦うつや、袖も湿ふゆきずりに

霊場詣、杖かろく、番の歌ごゑ

華やかに、巡礼衆が浮あゆみ、

峽は葉洩れの日のわかさ、風も霞みて、

春の雲白ういざよふ静けさに

鶯鳴けば、ちらちらと対の袂へ

笈摺へ、薄ら花ちるうららかさ。

かくて靈地の莊嚴に古き杉立つ

大木の霧の石階ほの青み、

白日の灯ともる奥深さ、遠みかしこみ

絵馬堂へ、——桜またちる菅笠や、

音羽の滝に紅の唇も嗽がむ

街少女、思もわかき瞳して

御堂のまへの静寂に鈴ふりならび

ぬかづくや、金の香炉きんかうろの薄けぶり、

羅蓋蓮華らがいれんげの闇縫やみぬうてほのかにそらへ

星の如ごとみづし仏龕ぶつぐんに光る燈明みあかしの

ふだんくゆの燐ないちんり、内陣たふとの尊たふとさ深さ、

先達せんだつに連れて献ささぐる歌うたごゑも

後世安楽ごせあんらくの願ねがかけて巡めぐる比丘びくらが

罪ならず、恋こひの風流ふうりうの遍歴へんれきに、

心も空も美しうあこがれいでし

君なればそぞろ涙なみだも薫かをるらむ。――

あるは月夜の黄金こがねみち、菜の花なのはなぞらの

星ほしあかり朧きくらろ煌きらめく野のの靄もに、

髻^{びん}の香吹^かかれ灰^{ほのしろ}白^{しろ}う急^{いそ}ぐ樂^がしき、

灯^ひは街^{まち}に、——しだれ柳^{やなぎ}の樾^{なみきぢ}路^ぢは

紅^{べに}提^{ちやう}灯^{ちん}の軒^{のき}つづき、桃^{ひな}も鄙^{ひな}めく

雛^{ひな}祭^{まつり}、店^{みせ}のあかみに伏^ふ眼^{しめ}して

奉^{ほう}謝^{しゃ}を乞^こはむ巡^{じゆん}礼^{れい}の清^{すず}しさ、わかき、

夕^{ゆふ}霧^{きり}に若^{わか}人^{かうど}忍^{しの}ぶそぞろきも

艶^{なま}めかぬほど、頬^ほにゑみて鈴^{すず}もほそぼそ

「普^ふ陀^だ落^{らく}や」練^ねれば戸^とごとの老^ね御^び達^{たち}

春^{はる}のひと夜^よの結^{けち}縁^{えん}に招^{せう}ぜむ杖^{じやう}と

白^{しろ}髪^がふり、転^{まろ}び、袖^{そで}とる殊^{しゆ}勝^{しやう}さや。——

行^いけかし、さらば南国^{なんごく}の番^{ばん}の御^ご寺^じへ

春なれば街の習慣ならはし美しむ

恋の祈誓きせいの初旅や、母にわかれて

少女らと、朝な夕なの花巡り、

やがて遍路の悲愁かなしみに雲も騒立さわだち

花ちらふ卯月とならば故さとへ、

ああ妻なよび髪ねびて、我恋わがこひ待てる

新室にひむろに帰りこよかし、いざさらば、

弥生やよひはじめの燕つばくらめ、袖すり光る

麗うらら日びを、君も行くかよ、杖あげて、

南無なむや大悲だいひの觀世音くわんぜおん、守らせたまへ、

朝風あさかぜに、ああ巡礼かしまだの鹿島立ち。

花ちる日

日も卯月、ひとりし行かば——水沼^{みぬま}べの緑のしとね、

身はゆるに寝^ねなまし。風の散^{ちりばな}花に、水生^{みづふ}の草に、

さざら波、ゆめの皺^{くちづけ}みの口吻^{くちづけ}に香にほふ夕^{ゆふべ}。

つねのごと花輪^{はなわ}編みつつ君おもひ水にむかへば、

遠霞^{ふるしろ}む山の、古^{ふる}城市^{しろ}の壁、森の戸までも、

白寂^{しらさび}の静けさ深さ、いと青に天も真澄^{そら}みぬ。

ああ、君よ、ゆめみる人^{ひと}の夕ながめ——汀^{みぎはら}白^{あきうど}みて、

木原^{こばら}みち、薄^{あきうど}ら花踏^{あきうど}む里乙女、六部、商人

文^{ふみ}づかひ——それも恋路^{うけ}の浮あゆみ、誰^たへか——目^ま守れば

雲照らふ落日^{いりひ}の紅^{あけ}に水の絵^{あや}の彩も乱れて

眼^めも病まむ、ややに古代^{ふるよ}のうれひして影ちり昏み

はや暮れぬ。市^{いち}は点燈^{ひともし}夫せはしげに走すらし。さあれ

葦かびの闇^{やみ}には鳩^うのほのなよび。小野の鈴の音、

夕づつのほのめき、ゆめの頬白^{はく}のみやびやすらに、

風ぬるみ、髪^{かみ}にはさくら、くさに地^ちの戯^{すすり}歎^{なげ}ふけつつ、

灰^ほに灯^ひは君^{きみ}が館^{やかた}に、妻琴の調べ澄む夜ぞ、

花やかに朧^{おろ}ろに耳はそのかみの日をしも薫^くゆれ。

ああ平和^{なごみ}、我^{われ}はも恋のさみし児か、神^{かみ}に斎^いきの

環も成りぬ。靄^もの青みに静^{しず}ごころ君思^{おも}ふ暫^{しばし}時

涙もろ、あたりの花に頬をうづめ泣かましものか。

ああ、ふたり二人。——君よ暮ぼしゆん春の市はえの榮、花に幕うち、

くれなゐくわせん紅の花にんず氎敷く間の遊樂や、おほぢ大路かがよひ

潮する人数みやび、風雅の衣きぬあや彩に乱れどよむ日。

よ縦しや、また花の館やかたに恋ごもれ、君が驕けうらく樂

琅玕のおばしま、銀の両もろとびら扉、※※の室屋らでんむろや、

早や飽きぬ、火炎まさめの正眼、肉あみの笑、蜜くちづけの接吻、

絵も香も髪も律呂しらべも宝はうぎよく玉も晴衣はれぎも酒も

あくどしや、今こそ憎め。げうよく（樂欲は君がまにまに）

ああ君よ、賤しづの児こなれば我はもや自然の巢へと

花ちる日、市をはなれて、鄙ひなごころ、またと歸らじ。

郊外

悄悄しほしほと我はあゆみき。

烟はたけには馬鈴薯ばれいしょ白う花咲きて、

雲雀の歌も夕暮の空にいざよひ、

南みなみふく風静やかに、神輿こしの列遠く青みき。

かかる日のかかる野末を。

嗚呼暮色微茫のあはひ、

笙^{せう}すずろ、かなたは町の夜祭^{よまつり}に

水天宮の舟囃子^{ふな}。——夕ごゑながら

乾^ひからびし黄ぐさの薰^{かをり}、そのかみも仄めき蒸しぬ、

温かき日なかの喘息^{あへぎ}。

父上は怒りたまひき、

『歌舞伎見は千年のち。』と。子はまたも

暗涙せぐるかなしきに大ぞらながめ、

歎^{ききよ}歎しつつ九年母^{くねんぼ}むきぬ。酸^すゆかりき。あはれそれより

われ世をば厭ひそめにき。——

鉦

人みな往にぬ、うすらひぬ。

森の御寺の夕づく日、

ほの照り黄ばむさみしらに

やがて鉦^{かね}うつ一人^{いちにん}の

その夜ぞこひし、野も暮れよ、

あはれ初秋、日もゆふべ、

落穂ふみつつ身はまよふ。

青空文庫情報

底本：「白秋全集 1」岩波書店

1984（昭和59）年12月5日

入力：飛鷹美緒

校正：林 幸雄

2010年7月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

第二邪宗門

北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>